

「旧作」「ジャコメッティ展」に寄す

伊藤 眞作

犬

私は嗅ぎ廻る。  
もはや落ちていないことは  
十分に承知していながらも  
なおも やはり  
腐肉の一片を求め 漁り歩く。  
とうに朽ち落ちたはずの  
内臓のひもじさに耐え切れずに  
なおも うろつき廻る  
探し求める。

立っている女

これは  
あの女  
ではない。  
極限までに  
風化  
し尽された  
垂直の  
「棒切」  
で  
しかない。  
しかし  
やはり  
この  
乳房の  
丸味  
こそは  
私が  
まさぐった  
膨み

への  
郷愁  
を  
残し  
ている。  
不義  
を  
犯して  
死んで  
いった  
風化  
された  
母の  
記憶  
の  
化石。

## 歩く男

私は歩いてる。  
出来るだけ大肢になるように  
と  
更に強く 脚を踏み出す。  
クラインの壺のような  
のっぺらぼうの貌つきで  
私はいま 出勤中である。  
恰もロボット歩行機 さながらに  
ただ反射的に  
私は 今朝も歩いてる  
義務感の固まりだけが  
ひたすら 反対の脚を前に出させる。

## 男の胸像

この男は 私ではありえない。  
しかし どう見ても  
やはり この男は私自身らしい。  
醜怪なケロイドに覆われた  
まるでひしゃげたこの貌つきこそ  
いまはの際に見せた私の表情であろう。  
だから この男の視線は  
もはや 何も見つけてはいない。  
処刑は断行された  
朝の陽ざしのなかで  
私の真心は ギロチンを真紅に染める。  
「営利にそぐわない」との咎で